渦中の農力

度重なる異常気象や未知のウイルスの流行など、波乱な情勢となった2020年。過酷な事態のなかで、生産者は何を思い、何を行ったのか……2020年の栽培過程を振り返りながら、渦中から未来を見据える生産現場のすがたに迫ります。（4号連載予定）

ダリア

古屋 久勝

ふるや・ひさかつ
JA秋田なまはげ花き部会秋田支部ダリア部長。秋田市雄和でダリア約15品種（ハウス8棟）と水稲を手掛け、県ダリア栽培技術アドバイザーとして、生産者の指導や後継者の育成に当たる。62歳。

――2020年の栽培は新型コロナウイルスの影響で、需要の落ち込みが見えるスタートとなりました。

今年の作付けについてどうしようか、春先は少し悩みました。ですが、いつも通りやっていこうと思い、単価は例年よりも安くなるだろうと覚悟しながらも、栽培数を少なくする気はありませんでした。予想通り、最初は安い値がついていましたが、JAの担当者の指導と市場への交渉のおかげで、回復してきているように感じます。

――今年も厳しい暑さが、ダリアの生育に影響したかと思います。

盆前は涼しかったものの、盆過ぎは酷暑になり、ダリアの開花が早まる事態になりました。私は全てハウス栽培で、9月中旬に出荷ピークを迎えるよう作付け計画を行っていたところが、8月に早まってしまうほど。2番花も早かったですね。露地栽培のダリアでも、9月に出荷予定のものが8月に前進したようです。

この時期は月曜日と水曜日、土曜日に出荷をしていたのですが、ダリアは日持ちが重要です。週3回の出荷では開花のタイミングと合わなくなり、出荷できない花が出てきていたため、「捨ててしまうよりは出荷しよう」と、最盛期に行う日曜日、火曜日、木曜日にも出荷する「裏日出荷」を、